【科学研究費補助金基盤 (A) プロジェクト】
バウッダコーシャの総括的研究：
仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて

2022 年 3 月

Bauddhakośa Newsletter no. 10

目次

総括
本プロジェクトの総括 1
バウッダコーシャ科研プロジェクト 2
本プロジェクトの成果刊行物 2
本プロジェクトに携わる研究者 3
活動報告
第 65 回 ICES シンポジウム V「〈大乗〉仏教—学派・教理・教判の異同とその背景を探る—」（斎藤 明） 4
記事 6
研究ノート
To read the text in the context of the translated language:
Chinese translation of the *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (Horiuchi Toshio) 8
ヤショーバドラ『金剛句心髄集難語釈』について（菊谷 竜太） 13
奥付 24

総括

本プロジェクトの総括

「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集の構築」をめざすバウッダコーシャ・プロジェクトは、本 2022（令和 4）年 3 月末をもって第一幕を閉じることになった。科学研究費補助金による 15 年間の学術プロジェクトとして着実に遂行され、期待に反することのない成果を公にすることができた、といっては手前味噌であろうか。

この間に、直接か間接かを問わず、内外の多くの研究者の支援と理解を得ることができた。以下に掲げる諸成果は、大学院生をふくむ多くの研究者による共同研究の賜である。いずれも仏教思想を理解する上での貴重なツールとして、インド学や仏教学という分野への貢献はもとより関連学界、さらには仏教思想に関心をいだく多くの人々の期待に応えるところがあるとすれば、研究代表者としてこの上ない喜びである。また、これらの他に研究代表者、研究分担者、ならびに研究協力者による関連成果も多くあるが、紙幅の制約を考慮して、ここでは共同研究の成果のみを掲載する。

これらの成果が礎となって、次世代の内外の若手研究者が、時代の要請に応えながら、さらに発展したバウッダコーシャ・プロジェクトを推進することを願ってやまない。末筆ながら、本プロジェクトの遂行に貢献、あるいはご協力いただき多くの方々に心より感謝申し上げたい。また、日本学術振興会の科学研究費補助金による支援もまた、本プロジェクトを遂行する上で、かけがえのないものであった。あらためて謝意を表したい。

2022（令和 4）年 3 月 6 日
研究代表者　斎藤明

バウッダコーシャ科研プロジェクト

- 2007–2010 年度・基盤研究（A）「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」（課題番号 19202002）
- 2011–2015 年度・基盤研究（S）「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築」（課題番号 23222001）
- 2016–2018 年度・基盤研究（A）「バウッダコーシャの新展開 — 仏教用語の日英基準訳語集の構築 —」（課題番号 16H01901）
- 2019–2021 年度・基盤研究（A）「バウッダコーシャの総括的研究 — 仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて —」（課題番号 19H00523）

本プロジェクトの成果刊行物

I 斎藤明（代表）・高橋晃一・堀内俊郎・松田訓典・一色大悟・岸清香編著『『倶舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』（仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集：バウッダコーシャ I）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 14. 山喜房佛書林，2011. xi + 222 pp.

II 斎藤明（代表）・一色大悟・高橋晃一・加藤弘二郎・堀内俊郎・石田尚敬・松田訓典編著『瑜伽行派の五位百法』（バウッダコーシャ II）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 16. 山喜房佛書林, 2014. xii + 319 pp.

III 榎本文雄（代表）・河﨑豊・名和隆乾・畑昌利・古川洋平編著『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（バウッダコーシャ III）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 17. 山喜房佛書林，2014. xvii + 235 pp.

IV 宮崎泉（代表）・横山剛・岡田英作・高務祐輝・林玄海編著『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』（バウッダコーシャ IV）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 20. 山喜房佛書林，2017. xxix + 301 pp.

V 室寺義仁（代表）・高務祐輝・岡田英作編著『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語』（バウッダコーシャ V）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 21. 山喜房佛書林, 2017. xvii + 185 pp.

VI Saito, A. (in chief), Isshiki, D., Takahashi, K., Ishida, H., Matsuda, K., and Ijuin S. eds. *The Seventy-five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośabhāṣya and Related Works.* Bauddhakośa VI. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, 2018. xiv + 165 pp.

VII 宮崎泉（代表）・横山剛・岡田英作・高務祐輝・林玄海・中山慧輝編著『『中観五蘊論』の法体系：五位七十五法対応語を除く主要術語の分析』（バウッダコーシャ VII). Bibliotheca Indologica et Buddhologica 24. 山喜房佛書林，2019. xxxix + 259 pp.

VIII Miyazaki, I. (in chief), Yokoyama, T., Okada, E., Takatsukasa, Y., Hayashi, G., Nakayama, K., Takeda, T., and Kominami, K. eds. *The Seventy-five Elements (dharma) in the Madhyamaka-pañcaskandhaka*. Bauddhakośa VIII. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, 2022. xi + 152 pp.

IX 三代舞・藤本庸裕・児玉瑛子・道元大成・須藤龍真・野武美弥子・岩田孝編著『『ニヤーヤビンドゥ』における認識論・論理学の体系』（バウッダコーシャ IX）. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 26. 山喜房佛書林，2022. xxvi + 415 pp.

X 斎藤明（代表）・清水尚史・生野昌範・横山剛・伊集院栞・王俊淇・楊潔・王楠・劉暢編著『スティラマティ『五蘊論釈』における五位百法対応語』（バウッダコーシャ X）Bibliotheca Indologica et Buddhologica 27. 山喜房佛書林，2022. xv + 353 pp.

（雑誌特集号）

- śraddhā/ saddhā の訳語をめぐって（古川洋平、一色大悟、高橋晃一、横山剛、真鍋智裕、林隆嗣）『仏教文化研究論集』17，2014.
- prajñā/ paññā の訳語をめぐって（河﨑豊、一色大悟、岡田英作、高橋晃一、Akira Saito、横山剛、石田尚敬）『仏教文化研究論集』18/19，2017.

（Newsletter）

no. 1, 2012.7; no. 2, 2013.3; no. 3, 2013.12; no. 4, 2015.9; no. 5, 2016.5; no. 6, 2017.7; no. 7, 2018.9;

no. 8, 2019.12; no. 9, 2020.12; no.10, 2022.3

（バウッダコーシャ科研プロジェクト HP）
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者

斎藤 明（国際仏教学大学院大学・教授）
「総括＋インド大乗仏教系論書」

研究分担者（9）

榎本 文雄（大阪大学・名誉教授）
「パーリ仏教関連術語」

下田 正弘（東京大学人文社会系研究科・教授）
「大乗仏教関連術語＋人文情報学関連情報の提供」

室寺 義仁（滋賀医科大学医学部・教授）
「初期瑜伽行唯識思想関連術語」

佐久間 秀範（筑波大学人文社会系・名誉教授）
「インド・中国唯識思想関連術語」

宮崎 泉（京都大学文学研究科・教授）
「中観思想関連術語」

山部 能宜（早稲田大学文学学術院・教授）
「インド・中国禅思想関連術語」

種村 隆元（大正大学仏教学部・准教授）
「インド・中国密教関連術語」

高橋 晃一（東京大学人文社会系研究科・准教授）
「瑜伽行唯識思想関連術語＋研究成果の Web 公開」

石田 尚敬（愛知学院大学文学部・准教授）
「仏教論理学関連術語」

研究協力者（45）

Paul Harrison（Stanford 大学・教授）
Jonathan Silk（Leiden 大学・教授）
Dorji Wangchuk（Hamburg 大学・教授）
葉 少勇（北京大学・副教授）
何 歓歓（浙江大学・教授）
王 俊淇（中国人民大学・講師）
鄭 祥教（金剛大学校・准教授）
ツルティム・ケサン（大谷大学・名誉教授）
Charles Muller（武蔵野大学経営学部・教授）
蓑輪 顕量（東京大学人文社会系研究科・教授）
石井 公成（駒澤大学仏教学部・教授）
渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）
桜井 宗信（東北大学文学研究科・教授）
馬場 紀寿（東京大学東洋文化研究所・教授）
新作 慶明（武蔵野大学経済学部・講師）
永崎 研宣（人文情報学研究所・所長）
苫米地 等流（人文情報学研究所・専任研究員）
菊谷 竜太（京都大学白眉センター・特定准教授）
堀内 俊郎（斎藤研究班）
一色 大悟（斎藤研究班）
崔 境眞（斎藤研究班）
清水 尚史（斎藤研究班）
楊 潔（斎藤研究班）
王 楠（斎藤研究班）
劉 暢（斎藤研究班）
生野 昌範（斎藤研究班）
河﨑 豊（榎本研究班）
名和 隆乾（榎本研究班）
古川 洋平（榎本研究班）
青野 道彦（下田研究班）
岡田 英作（室寺研究班）
高務 祐輝（室寺研究班）
中山 慧輝（室寺研究班）
横山 剛（宮崎研究班）
三代 舞（山部研究班）
真鍋 智裕（山部研究班）
佐藤 晃（山部研究班）
野武 美弥子（山部研究班）
藤本 庸裕（山部研究班）
道元 大成（山部研究班）
児玉 瑛子（山部研究班）
須藤 龍真（山部研究班）
倉西 憲一（種村研究班）
大塚 恵俊（種村研究班）
伊集院 栞（斎藤/種村研究班）

活動報告

第 65 回 ICES シンポジウム V
「〈大乗〉仏教—学派・教理・教判の異同とその背景を探る—」

2021.5.15（東方学会主催、オンラインにて）　斎藤 明（国際仏教学大学院大学・教授）

近年、大乗仏教の起源と実態をめぐる議論は活発に行われてきた。国際東方学者会議においても、これまでに大乗仏教の起源論（二〇〇三年）、大乗経典と論書の関係（二〇〇六年）、および大乗仏教が登場する背景となったインド宗教思想史の展開（二〇一一年）に焦点を当てたシンポジウムを開く機会があった。またその後、三十年ぶりに『講座・大乗仏教』（全十巻）が一新され、『シリーズ大乗仏教』（全十巻、春秋社、二〇一一～二〇一四年）が公刊された。

これらの議論を踏まえたうえで、また国内外におけるその後の関連研究の進展を見据えながら、今回のシンポジウムは企画された。とくに、大乗仏教を特色づけるともいえる伝統仏教との異同の自覚、大乗仏教内部における学派の形成、教理史の展開、およびこれらすべてに関係する広義の教判（教相判釈）の問題を視野に収めながら議論を展開することを目ざした。

はじめに、司会者の斎藤明（国際仏教学大学院大学）は、以上のような趣旨と進行の段取りを説明した。今回はオンライン開催でもあり、また質疑応答と議論に多くの時間を当てることにしたという趣旨も付言された。

まず、馬場紀寿氏（東京大学）は、「「大乗」と「上座部」—方広（/方等）、アバヤギリ派、ジェータヴァナ派—」と題して、上座部の伝統を基本とするスリランカにおける「大乗」を再考した。氏によれば、遅くとも四世紀頃には大乗を指す「方広」という語がスリランカの碑文に現れ、「大乗」を信じる出家者がスリランカに渡ってきていた。八世紀頃には、アバヤギリヴィハーラ（無畏山寺）派が『宝篋印経』『金剛頂経』といった密教経典を、またジェータヴァナヴィハーラ（祇陀林寺）派は『二万五千頌般若経』を受容していた。これに対して、十二世紀以降に唯一の正統派となるマハーヴィハーラ（大寺）派が編纂した史書では、「方広」（＝大乗）は非仏説（abuddhavacana）と定義されることになった。その上で氏は、同じスリランカの上座部に属する僧院の間で、一方では大乗を受容し、他方で大乗を斥けたことの背景を考察した。

続いて、Paul Harrison 氏（スタンフォード大学）は、“The Rhetorical Uses of Complexity in Mahāyāna Sūtras”（大乗諸経典の複雑性を示す修辞的用法）と題して、従来の研究が見落としてきた大乗仏教のテキスト内容、目的、および方法に顕著に見られる、二つの形式的な特徴に焦点を当てて考察を加えた。その一つが、般若経や法華経にも顕著にうかがえるように、直截的なものであれ、かなり挑戦的で逆説な表現によるものであれ、大乗経典にみる「自己言及」という特徴である。第二は、中心となるテーマを定型文や、特定の語句の列挙という手法を用いて敷衍し拡張するという特徴である。氏は、もとより幅広い種類の大乗経典の特徴はこれらに尽きることはないが、大乗経典に受け継がれたある種の DNA とし顕著であることを、『八千頌般若経』『金剛般若経』『法華経』『般舟三昧經』『三昧王経』の例を挙げながら詳説した。

午後に入って、本庄良文氏（佛教大学）は、「アビダルマ仏教から「大乗」仏教へ—聖典解釈論の観点から—」と題する発表を行なった。氏によれば、大乗仏教がいかに興起したかは、インド宗教思想史上の最大級の難問である。しかし、アビダルマ仏教と大乗仏教のいずれの資料も、大乗仏教興起からかなり隔たった後代の形態によってしか今に伝わらず、しかも前者の資料もごく一部の部派のもののみである。そのような資料的な限界を念頭に置いたうえで氏は、「仏説論」「聖典論」の観点からいくつかの考察を加えた。氏によれば、かつて平川彰が指摘したように、大乗仏教に継承された教義・理論は、特定の部派に偏るものではない。第二に、これと関連して、大乗教徒が大乗仏典を作成するにあたって、部派仏教の三蔵すべてを利用することができたと考えられるという。第三にまた氏は、

大乗教徒が新しい経典を何らの「うしろめたさ」なしに釈迦の直説（仏説）として創作し、それを自ら信じ、他者を信じさせたのみならず、仏説であることを否定する保守的な部派仏教徒に対して「謗法」の罪と墮地獄の報いを負うとした背景を考察した。最後に、部派仏教から大乗への橋渡しをしたと言われる譬喩者・経部が果たした役割にも言及した。

次に、斎藤明は、「インド中観派と瑜伽行唯識派—その異同と背景を再考する—」と題して、インド大乗仏教の二大学派の異同と背景を再考した。周知のように、七世紀後半におけるインドの大乗仏教について義浄は、『南海寄帰内法伝』において「云う所の大乗は二種に過ぎない。一には則ち中観、二には乃ち瑜伽」と伝え、これら二学派の教理上の特色を「中観は則ち俗有真空・体虚如幻であり、瑜伽は則ち外無内有・事皆唯識である」と簡潔に描きだす。以上の義浄の指摘は、中観派と瑜伽行［唯識］派と呼ばれる両学派の思想的な相違に関する当時の一般的な理解を知るうえで重要である。ただし、本発表で斎藤は、ナーガールジュナ（龍樹、一五〇～二五〇頃）を中観派の祖師と位置づけることの問題点を、いくつかの角度から批判的に再考した。その論点として、（一）初期の『般若経』の空思想に対する－空イコール非存在という－誤解を、主に哲学的意味論の視点から正し、空を不生不滅の縁起に等値されるとしたナーガールジュナの「大乗のアビダルマ論師」としての役割と位置づけ、（二）『般若経』の無自性（＝自性空）の説を未了義とし、主に認識論的な観点から了義としての三自性説（＝三性説）を意味づけた初期瑜伽行派の学説の登場（四世紀頃）、さらに（三）その瑜伽行派の三性説を、勝義（最高の真実）と世俗（＝言語習慣）の二真理（二諦）説の観点から、意味論的・認識論的、および修道論的な文脈から批判を加え、名実ともに学派としての中観派を創始したバーヴィヴェーカ（四九〇～五七〇頃）の思想史上の位置づけ、という三つのポイントを挙げて考察を加えた。

続いて、高橋晃一氏（東京大学）は、「瑜伽行派における「菩薩蔵」と「声聞蔵」」と題する発表を行なった。大乗経典は「菩薩蔵」（bodhisattvapiṭaka）と呼ばれることがあり、また「広大な教え」という意味で「方広」（vaipulya）とも呼ばれる。「方広」は伝統的な経典分類法である十二分教中の方広部を指す術語でもあり、実際に菩薩蔵を十二分教の方広部に位置づけることもある。この「方広」は、単語としては「広大さ」をも意味しうる。『瑜伽師地論』「本地分」中の『菩薩地』は、「方広」という語のもつ両義性を巧みに利用し、大乗の教えである菩薩蔵を十二分教の方広部に位置づける一方で、この菩薩蔵が声聞乗の教えの枠組みである十二分教よりも広大であるという解釈を提示する。つまり、仏説の伝統の中に大乗経典を収めながらも、同時にまた声聞乗の伝統の枠組みに収まらない広大さが大乗にあることを示す。このような大乗に関する理解は、『瑜伽師地論』の全体にわたって散見されるほか、『菩薩地』と関係の深い『大乗荘厳経論』にも伝わり、さらにアサンガ（五世紀頃）の『阿毘達磨集論』や『摂大乗論』に受け継がれている。氏は、大乗経典に対する瑜伽行派の見解を「菩薩蔵」と「声聞蔵」の対比を中心に考察した。

最後に、藤井淳氏（駒澤大学）は、「中国の教判から見るインド初期大乗研究の問題点—「菩薩乗・仏乗・大乗」を中心に—」と題する発表を行なった。氏によれば、中国の教判は鳩摩羅什以降に始まり、吉蔵以降に本格化する。それは四〇〇年以後のことで、インドではすでに中期大乗の時期になっているため、初期の大乗仏教について中国の教判から引き出すことのできる情報は必ずしも多くはない。一方で漢訳仏典という制約はあるものの、彼らは現代の学者よりもはるかに多量の文献に目を通して比較していた。中国では『維摩経』を「抑揚教」と位置づけ、「共の十地」を説くのは『小品［般若経］』ではなく、『大品［般若経］』であると理解していた。一方でまた中国では、早い段階から阿含経を三蔵教という低い教えとして位置づけ、それについての本格的な分析を行うことはなかった。そのような状況を踏まえて氏は、中国の教判で指摘された点に着目し、それらの起源について（一）阿含／ニカーヤ、（二）アビダルマ、及び（三）初期大乗経典の中に展開を辿っていくと初期大乗を考える上で興味深い点も浮かび上がることを示唆した。さらに氏は、教判の問題とも関連して、「地」（bhūmi）や「乗」（yāna）等の術語の意味をめぐって、いくつかの問題提起を行った。

以上の六つの発表ののち、最後に五十分ほどの時間を総括的な質疑応答と議論に当てることができた。発表者間の質疑応答にくわえ、参加者からの興味深い質

問やコメントも印象に残った。終了後は、オンライン開催であったこともあり、通例の懇親会に代わって、自由参加のオンライン茶話会を一時間余り継続し、期せずして、忌憚のない意見交換と貴重な情報交換を行うかけがえのない機会ともなった。

（『東方学会報』120, pp. 20–22 より転載）

記事

令和 2 年度第 2 回全体研究会

2021 年 3 月 6 日（土）13:30–18:00
オンラインリモート会議システム（Zoom）による開催

1. 研究代表者より、令和 2 年度の研究実績と今後のプロジェクトの方向について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における令和 2 年度の研究実績と次年度の研究計画について説明がなされた。
3. 研究代表者より、次年度の研究組織について確認がなされた。
4. 研究発表（発表 25 分、質疑応答 15 分）が行われた。発表者と題目は以下の通り。
   - 生野 昌範
     チベット伝存の古くて新しいサンスクリット写本
   - 藤本 庸裕
     動詞 anu-śī-と随眠の「増長」：説一切有部における特異な術語の予備的考察
   - 王 俊淇（Wang, Junqi）
     A Preliminary Study of a Newly Discovered Sanskrit Manuscript of Nāgārjuna's *Sūtrasamuccaya*
   - 堀内 俊郎
     An Example of a Revision of Tibetan Translation: From *Abhidharmasamuccayavyākhyā*
   - 斎藤 明
     On the Etymological Meaning of *satkāyadṛṣṭi*
5. 上記の発表について総括と討論がなされた。

令和 3 年度第 1 回全体研究会

2021 年 7 月 24 日（土）14:00–18:00
オンラインリモート会議システム（Zoom）による開催

1. 研究代表者より、これまでの研究実績と成果刊行について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における研究の現状と本年度の研究計画について説明がなされた。
3. 研究代表者より、次年度の ICES でのシンポジウムの計画、およびニューズレターについて説明がなされた。
4. 研究発表（発表 40 分、質疑応答 10 分）が行われた。発表者と題目は以下の通り。
   - 楊 潔
     『瑜伽師地論』「有尋有伺地」における「結生」の背景
   - 堀内 俊郎
     Textcritical Remarks on the *Bauddhakośa II*
   - 斎藤 明
     帰謬論法とそのチベット語訳表現をめぐって
5. 上記の発表について総括と討論がなされた。

令和 3 年度第 2 回全体研究会

2022 年 3 月 5 日（土）13:00–18:45
オンラインリモート会議システム（Zoom）による開催

1. 研究代表者より、これまでの研究実績と成果刊行について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における研究の総括について説明がなされた。
3. 研究代表者より、次年度の ICES でのシンポジウムの計画、およびニューズレターについて説明がなされた。
4. 研究発表（発表 30 分、質疑応答 10 分）が行われた。発表者と題目は以下の通り。
   - 中山 慧輝
     『瑜伽師地論』における心所法「念」に関する経典とその解釈：「摂異門分」と「摂決択分」の参照関係を手がかりに

- 藤本 庸裕
  「随増」（anu-śī-）再考
- 横山 剛
  有部アビダルマの法体系が担う役割と機能について考える：『中観五蘊論』を手掛かりに
- 堀内 俊郎
  『楞伽経』における現識と分別事識
- 三代 舞・藤本 庸裕・児玉 瑛子
  『『ニヤーヤビンドゥ』における認識論・論理学の体系』作成における諸問題と今後の展望
- 石田 尚敬
  モークシャーカラグプタ著『タルカバーシャー』の思想史的位置づけ：第 3 章の個別論題を手掛かりとして

5. 上記の発表について総括と討論がなされた。

研究ノート

To read the text in the context of the translated language: Chinese translation of the *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya*

Horiuchi Toshio (Zhejiang University)[1]

Introduction

There are several ways of approaching Buddhist texts originally written in Sanskrit (Skt) and then translated into classical Tibetan and/or Chinese language. One method is to read the texts in the context of the translated language. Another is to read these texts as a means of investigating the Indian original to understand the ideas of Indian masters. While both approaches should be considered, one should be aware of the characteristics of the approach that one chooses when reading these translated texts.

In this essay, I present an example that should be analyzed using the first approach to the translated texts. It is from Prabhākaramitra's Chinese translation of the *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (MSABh), which consists of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (MSA, verse) and its commentary *bhāṣya* (MSABh, prose). This text is also preserved as a Sanskrit (Skt) original and Tibetan translation. Since the Tibetan one is a faithful translation of Skt, I will disregard the comparison between them and compare only Skt and Chinese.

Although this Chinese translation[2] is elaborate, it is not a faithful or literal translation of Skt. For example, as noted by Ui 1961, there are additions that do not exist in Skt. Moreover, during the translation of verses, the content was "written in 4 lines with 5 kanji characters in each line 五言四句." Consequently, in some cases, one verse was sometimes translated into two verses in Chinese. Thus, the verse (MSA) was sometimes translated by adopting the words of the prose commentary (MSABh).

In this paper, I will select one passage from the MSA/Bh (I.21) and show why this Chinese translation should be treated as an independent text with its own value, rather than a means of investigating the Indian original.

1 MSA, I.21

The following is the final (21st) verse in Chapter One of the text, the subject of which is to prove the authenticity of Mahāyāna. Skt and Chinese translation run as follows:

MSABh, ad., MSA, I.21 (Nagao 2007: 44);		T1604, vol. 31.592c25–593a2
1 (Introduction to a verse by MSABh)	*ayathārutañ cārtham avijānato 'pi pratighāto na yukta iti pratighātāyoge ślokaḥ*	次遮惡意. 偈曰

[1] 堀内俊郎. 浙江大学副教授, 東洋大学東洋学研究所等客員研究員.

[2] Cf. Huimin 2012: 5. 印度大乘佛教瑜伽行派之《大乘莊嚴經論》(*mahāyānasūtrālaṁkāra*), 曾在印度名重一時, 所謂「凡大小乘學, 悉以此論為本, 若於此不通, 未可弘法」. 於唐朝貞觀年間 (630–632), 由波羅頗迦羅蜜多羅 (Prabhākaramitra, 565–633) 漢譯之後, 雖然有慧淨法師講述與注疏 (已逸失), 但流傳不久. 原因可能是漢譯品質不如玄奘 (602–664) 之其他各種瑜伽行派漢譯典籍, 例如《攝大乘論》, 《成唯識論》等, 以及這些後期的論典的思想體系比較圖熟, 在漢傳佛教都有形成「攝論宗」, 「唯識宗」等宗派.

2 (Verse of MSA)	a. *manaḥ pradoṣaḥ prakṛtipraduṣṭo hy ayuktarūpe 'pi na yuktarūpaḥ* | b. *prāg eva saṃdehagatasya dharme tasmād upekṣaiva varaṃ hy adoṣā* || 21 ||	a. 惡意自性惡不善不應起 b. 況移於善處應捨大過故
3 (Commentary by MSABh)	*prakṛtipraduṣṭa iti prakṛtisāvadyaḥ* | *tasmād upekṣaiva varaṃ* | *kasmāt* | *sā hy adoṣā* | *pratighātas tu sadoṣaḥ* |	釋曰. 「惡意」者. 是憎嫉心. 「自性惡」者. 此心是自性罪. 尚不可於過失法中起. 何況於非過法中起. 是故急應須捨大過患故.

Of these, 1 and 3 are the introduction and commentary, respectively, whereas 2 is the verse of MSA (the underlined part of the commentary (3) are word[s] that are in the verse).

2 Discrepancy between Skt and Chinese MSABh

The English translation of the above Skt text is as follows. (The Tibetan matches Skt well. The words in "" are those in the verse.)

1.
Moreover, since anger is not proper even for the one who does not know the non-literal meaning.[3] In fact, there is a verse regarding the improperness of the anger:
2.[4]
a. A wicked mind is sinful by nature and is not proper even toward something that is improper.
b. How much more toward the Dharma that is situated in doubt. Therefore, equanimity (*upekṣā*) is preferable, because it is without fault.
3.
"Sin by nature" [means] that which is sinful by nature.[5] "Therefore, equanimity (*upekṣā*), precisely, is preferable." Why? "Because" it (= equanimity (*upekṣā*)) is "without fault." On the other hand, anger is faulty.

The corresponding part 1 in Chinese is very concise and runs as follows:

1. 次遮惡意. 偈曰 Next, [I will] prevent a malicious mind. The verse says [as follows]:

Regarding 2 and 3, let us consider previous translations by Yamagami 1938 and Hakamaya & Arai 1993 (both are the Japanese *kundoku* style translation of the Chinese translation).

2a. Yamagami 1938: One should not harbor a malicious mind, something that is sinful by nature and unwholesome. (悪意と自性悪と, 不善は応に起すべからず.)
Hakamaya & Arai 1993: A malicious mind is bad by nature. One should not produce [it] toward what is unwholesome too. (悪意は自性悪にして 不善のものにも応に起こすべからず)
2b. Yamagami 1938, Hakamaya & Arai 1993: How much more do we need to transfer [it] to the good place/thing, because big faults should be abandoned (況んや善処に移すをや 応に大過は捨つべきが故なり/故に)

Although Yamagami 1938 and Hakamaya & Arai

[3] According to the Yogācāras, the teaching of emptiness in Mahāyāna is not nihilism and should not be taken literally. However, the opponent criticizes and shows anger towards Mahāyāna, not knowing that point. Therefore, there is a verse to remonstrate anger towards Mahāyāna.
[4] The context behind this verse is as follows: those of Śrāvakayāna criticize Mahāyāna by saying that it is not the Buddha's word. However, that criticism is nothing but anger, which is sinful. Thus, remain silent/indifferent.
[5] This is a technical term that is paired with *pratikṣepaṇasāvadya*, that which is not a sin per se.

1993's translations of 2b converges, 2a is different. Hakamaya & Arai 1993 translates the first part of 2a as subject and predicate. The latter part of it is translated after adding the locative (something like 於) to 不善. This matches the original Skt. It must be natural because unlike Yamagami 1938, Hakamaya & Arai 1993 consulted the Skt as well when translating this Chinese translation. However, at a glance, from the viewpoint of Chinese grammar, Yamagami 1938, which understands 悪意, 自性悪, and 不善 as appositional, seems to be a more literal translation of the Chinese text. However, the commentary part of this verse shows that one can understand this verse as Hakamaya & Arai 1993 did. I will cite and translate part 3 of the Chinese translation, except for the last sentence.

> 3. Commentary. "Malicious mind 悪意" is hatred and envy. "Bad by nature 自性悪" [means:] this mind [此心 = hatred and envy] is sin by nature. One should not produce [it] toward (於) the things that are with faults. How much more [should one] produce [it] toward (於) the elements that are without faults (尚不可於過失法中起)?

The underlined part does not exist in the Skt original and seems to be a supplement added by Chinese translators (or may be the supplement from the last sentence of Skt). The first two sentences suggest that this Chinese translation understands the first part of 2a as a subject and predicate in the same way that the Skt version does. Moreover, it is obvious that 尚不可於過失法中起 in the commentary part is a commentary or substantially a paraphrase of "不善不應起" in the verse. Therefore, it is reasonable to understand the verse by adding 於 (toward, 「に」) to the 不善 as Hakamaya & Arai 1993 did. This is possible within the Chinese context itself, without resorting to the Skt. We should remember that this is a translation of a verse in which the number of syllables is strictly decided (in this case, five Chinese characters for each line). Therefore, it is assumed here that the Chinese translators had to omit 於 before the 不善 because of a meter (*metri causa*).

However, regarding the last quarter of 2, I have a different understanding. Let me show the text and previous translations.

> [The final quarter of 2 and its commentary:]
> verse: 應捨大過故
> Yamagami 1938, Hakamaya & Arai 1993: Because big faults should be abandoned (応に大過は捨つべきが故なり/故に)
> prose (commentary): 是故急應須捨大過患故.
> Yamagami 1938: Therefore, one should abandon [it] in a hurry, because it is a big fault/calamity. (是の故に急に応に須らく捨つべし, そは大過患なるべきが故なり.)
> Hakamaya & Arai 1993: Therefore, because one should abandon a big fault/calamity in a hurry. (是の故に, 急ぎて応に須らく大過患を捨つべきが故なり.)

Hakamaya & Arai 1993's understanding does not make sense here. What is the logical connection of "therefore" (是故, lit. "because of this") with the following words? Even if one adds "namely" after "therefore," it still does not make sense. Because of two 故, it must be natural to split the sentence into 是故急應須捨 and 大過患故. If so, 大過患 here functions as a predicate rather than the object of abandoning 捨 and one should add a subject (そは, that is) to it as Yamagami 1938 did.[6] However, if so, Yamagami 1938 should have also translated the verse part in that way. My alternative to the verse part is as follows:

> verse: 應捨大過故
> One should abandon [it], because [it is] a big fault. (応に捨つべきなり. 大過失なるが故に.)

Although both Yamagami 1938 and Hakamaya & Arai 1993 are problematic, the Chinese text here, itself, is not so tough and can be translated as follows:

[6] In this case, the subject is 悪意. However, Yamagami 1938 may had understood it as 悪意, 自性悪, and 不善 because he understood the verse that way.

1. Next, [I will] prevent having a malicious mind. The verse says:

2a. A malicious mind is bad by nature. One should not harbor [it] even toward what is unwholesome [too].

2b. How much more to transfer [it] to a good place/thing? One should abandon [it], because [it is] a big fault.

3. Commentary. "Malicious mind" is hatred and envy. "Bad by nature" [means:] this mind [此心 = hatred and envy] is sinful by nature. One should not produce [it] toward the things that are with faults. How much more [should one] produce [it] toward the elements that are without faults? Therefore, one should abandon [it] in a hurry, because it is a big fault/calamity.

3 Investigation of the background of discrepancy

Let us move to our main point. Although the Chinese text makes perfect sense, it is different from the Skt one. The key point is obviously 捨. In the above translation, 捨 is treated as meaning "to abandon." However, 捨 is, of course, a traditional Chinese translation of *upekṣā*, which means equanimity, indifference, and non-partiality (this term is at least found in 求那跋陀羅 Guṇabhadra, 394–468's translation: 雜阿含經 *Záāhánjīng*[7]). This *upekṣā* is, of course, one of the 四無量心 four immeasurables and virtues in the Buddhist doctrine. Apart from these four immeasurables, this *upekṣā* is listed as one of the wholesome (*kuśala*) elements of the Abhidharma and Yogācāra doctrine.

Why did this change in meaning occur? Here, we should remember that the Chinese translation of Buddhist texts is often a result of teamwork. In the case of MSABh, there were as many as nineteen members involved, who played roles like 訳主, 訳語, 証義, 綴文, and 銓定.[8] The point here is that the Chinese translation of the Indian text is refined as the Chinese language after translation or transcription.

Considering these circumstances, the above discrepancy regarding 捨/*upekṣā* can be explained as follows: 捨 was a proper translation of *upekṣā*, meaning equanimity. However, at the time of refinement of Chinese by those who did not notice that this is a translation of *upekṣā*, it was (mis)-understood as "abandoning." Consequently, the subject of the sentence was changed from equanimity to a malicious mind. Thus, the entire structure of the sentence was completely changed already at the time of finishing the translation, not during the transmission of the translation.

There may be a possibility of forcing the Chinese to conform to Skt. More precisely, one can read 應捨大過故 as "one should be indifferent (*upekṣā*) because [malicious mind is] a big fault." However, this seems to be too demanding. Skt (see section 2) is still different because it states "therefore, equanimity (*upekṣā*) precisely is preferable because it is without fault." The prose commentary can also be translated as "therefore, one should be indifferent in a hurry because [malicious mind is] a big fault/calamity" (是故急應須捨大過患故). However, this is a demanding task. Moreover, 急 (in a hurry) does not fit the meaning well. If one has a malicious mind that is a big fault, one should abandon it in a hurry. However, one should not necessarily be indifferent in a hurry.

4 How to approach the Chinese translation of MSABh

This example suggests that we approach this text as an independent Chinese text with its own value, rather than as a source for investigating the original form of the Indian MSABh. It is true that this is a translation of the Skt in nature, and Indologists should read this in the context of Skt. However, as we have seen in this

[7] T2.209b7: 慈悲喜捨.

[8] Ui 1961: 4; Hakamaya & Arai 1993: 8; Huimin 2012: 7, fn.2.

section, this translation is modified to the extent that the sentences are renewed (although the meaning of both Skt and Chinese here is in the same line). Therefore, if one translates this Chinese translation into another language, careful treatment, in which one values the Chinese context as much as possible, will be needed. This text represents a case that urges us to read it in the context of the translated language.

Bibliography

Hakamaya & Arai 1993: Hakamaya Noriaki 袴谷憲昭 and Arai Hiroaki 荒井裕明. 1993. *Daijōshōgonkyōron Shinkokuyakudaizōkyo* 大乗荘厳経論 新国訳大蔵経. Tokyo: Daizoshuppan.

Huimin 2012: Shi Huimin 釋惠敏. 2012. "Fànběn Dàchéng zhuāngyán jīng lùn zhī yánjiū bǎinián jiǎn shǐ yǔ wèilái zhǎnwàng" 梵本《大乘莊嚴經論》之研究百年簡史與未來展望. In *Zhèngguān* 正観 62, 5–97.

MSABh: Nagao Gajin 長尾雅人. 2007. *Daijōshōgonkyōron wayaku to chūkai: Nagao Gajin kenkyū nōto 1*『大乗荘厳経論』和訳と註解：長尾雅人研究ノート (1). Kyoto: Nagao Bunko.

Ui 1961: Ui Hakuju 宇井伯壽. *Daijōshōgonkyōron kenkyū* 大乗荘嚴経論研究. Tokyo: Iwanami Shoten.

Yamagami 1938: Yamagami Sōgen 山上曹源. 1938. "*Daijōshōgonkyōron*" 大乗荘厳経論. In *Kokuyakuissaikyō Yugabu 12* 国訳一切経 瑜伽部 十二. Tokyo: Daitoshuppan.

(This study is supported by JSPS KAKENHI Grant Number 17KK0031.)

ヤショーバドラ『金剛句心髄集難語釈』について*

菊谷 竜太 （京都大学白眉センター 特定准教授）

1 はじめに

いわゆる後期インド密教と呼ばれる時代（8–13 CE）、現在のインド・オリッサ州ならびにバングラデシュを中心にいくつかの巨大僧院が建立され、顕密の双方に秀でた学匠たちを輩出した。なかでも「六賢門」と呼ばれる六人の高僧たちがよく知られている。彼らは象徴的に東西南北の四門（ラトナーカラシャーンティ・ヴァーギーシュヴァラキールティ・プラジュニャーカラマティ・ナーローパー）および中央の二柱（ラトナヴァジュラ・ジュニャーナシュリーミトラ）に配置される。

ヴィクラマシーラあるいはナーランダー僧院の「六賢門」がよく知られるものの、加納［2017］が示唆するように、その取り扱いについては「六賢門」を伝える諸資料とともに注意が必要である[1]。枠組みとしての問題に加えてラトナーカラシャーンティあるいはナーローパーに帰される著作のなかには、彼らの直弟子ないし本人に仮託されたと考えうる著作もいくつかある[2]。

とりわけ『カーラチャクラタントラ』*Kālacakratantra* をめぐる系譜上に「六賢門」のナーローパーあるいは直弟子アドヴァヤヴァジュラ（別名マイトレーヤナータ/マイトリーパ）を置くことに羽田野［1986(1951): 34–35］は警鐘を鳴らしている[3]。

2 ヤショーバドラとナーローパー

プトゥン・リンチェントゥプ（1290–1364）のラグサンヴァラ総説『サンヴァラ要説』によれば、ヤショーバドラ（sNyan grags bzang po; *Yaśobhadra）はジュニャーナシッディ（Jñānasiddhi）と並んで、ナーローパーの別名の一つとされている。

さらにヤショーバドラの『金剛句心髄集難語釈』*Vajrapadasārasaṃgrahapañjikā* についてプトゥンは「ナーロー大注（Nāro grel chen）」と呼び、北京版もそれに従うがデルゲ版における著者名はあくまでヤショーバドラとなっており、テキストの本文中にもナーローパーという名前は見当たらない。

羽田野［1986(1951): 247–248］もまた同注をナーローパーに比定することに慎重な態度を取っているが、その理由の一つとして考えられるのは、『金剛句心髄集難語釈』の翻訳を主導しチベットへと伝えたシャーキャシュリーバドラ（1127–1225）が師事した一人ア

---

* 本稿はインド密教術語集成を構築するための予備的作業の一環であるが、ヤショーバドラ『金剛句心髄集難語釈』とシャーキャシュリーバドラの『金剛句心髄集難語釈』『金剛句心集難語釈』両書との関係をはじめ十分に扱えなかったいくつかの問題については別稿であらためて取り上げたい。

1 「六賢門」を記載する資料については加納［2017］に網羅されているが、プトゥン『サンヴァラ要説』（東北 5042）が伝えるナーロー略伝の一節「吉祥ナーランダーにおわす六賢門のうち「北門（衛）」と称された（Cha 47b6–7: dpal na lendra na mkhas pa’i sgo drug yod pa’i byang sgo par grags so）」、あるいは梵文アドヴァヤヴァジュラ伝の記述（奥山［1991: 470–471］）もあわせて注目される。

2 『略集次第』*Piṇḍīkrama* 注『ラトナーヴァリー』*Ratnāvalī*（東北 1826、北京 2690）はラトナーカラシャーンティに仮託された作品と目される（羽田野［1987b(1958): 84］）。さらにチベット語訳ではラトナーカラに帰される『灌頂要旨』*Abhiṣekanirukti* も実際は彼の弟子のジナスジャヤシュリーグプタの手になる可能性が指摘されている（Isaacson［2010: 267 (n. 19)］）。またナーローパーの著作については、秘密集会ないしカーラチャクラ系を中心にプトゥン・ツォンカパによって仮託とされる著作が見出され、本稿で取り扱う『金剛句心髄集難語釈』も六賢門のナーローパーとは別人の作であるとの疑念があるが（羽田野［1987a(1950): 249］）、大観［2016, 2018］はそれに否定的である。

3 アドヴァヤヴァジュラの手になると目される作品群がカーラチャクラの影響を受けていないという見解については Isaacson & Sferra［2014: 74–75, 2019: 246–247］）を参照されたい。

バヤキールティ（別名 Pham thing pa can）がナーローパーの別名と同じであるからかもしれない[4]。

そもそも「ナーローパー」という名前そのものも、① Nāropā/ Nāropāda（梵文アドヴァヤヴァジュラ伝）、② Naḍapāda/ Nāḍapāda（『灌頂略説注釈勝義集』奥書き）、③ *Nārottāpa（プトゥン『サンヴァラ史』）などいくつか系統がある[5]。ターラナータ（1575−1634）によれば、作者がボーディバドラと記された『金剛句心髄集難語釈』梵文写本も存在すると伝えられるが、これについてはあとで述べる。

3 ヤショーバドラ作『金剛句心髄集難語釈』*Vajrapadasārasaṃgrahapañjikā* について

3-1 ヤショーバドラに帰される著作

ヤショーバドラの名を冠する著作としては以下の２点がチベット大蔵経中に収録される。

①『金剛句心髄集難語釈』*Vajrapadasārasaṃgraha-pañjikā*（東北 1186、北京 2316）
②『一切秘密燈広注』**Sarvaguhyapradīpaṭīkā*（東北 1787、北京 2652）

このうち、① はカーラチャクラの体系にもとづくヘーヴァジュラ注、② は『秘密集会』第 18 分に対する注釈である。① はシャーキャシュリーバドラの主導によって翻訳・伝授され、② はスムリティージュニャーナキールティ（11 世紀頃）によって訳出された[6]。

3-2 『金剛句心髄集難語釈』の著者問題

ターラナータの「自伝」によれば、ラツェ西北の仏塔チュン・リウォチェ（gChung ri bo che）旧蔵の梵文写本に『金剛句心髄集難語釈』が含まれていた[7]。

すなわち、ヤルルン翻訳官タクパギェンツェン（1242−1346）がかつて所持したと伝えられる「カーラチャクラ」大注『無垢光』*Vimalaprabhā* に加え、ナーローパーに帰される ①『灌頂略説』*Sekoddeśa* 注『灌頂略説注釈勝義集』*Paramārthasaṃgraha-Sekoddeśaṭīkā* と ②「ヘーヴァジュラ」注『金剛句心髄集難語釈』の両書とがあった。① にはその奥書に実際にナーローパーダという名前が出ていると言う[8]。

さらにターラナータは ② については過去チベットで翻訳されたときに「カシュミール出身の比丘 sNyan grags bzang po の著作」と（訳され）るが、実見したリウォチェの写本には「sNyan grags bzang po」に当たる「Yaśobhadra」という語がなく、代わりに「Byang chub bzang po」に当たる「Bodhibharda」とあるのでカシュミール出身のボーディバドラを『金剛句心髄集難語釈』として作者に認めるのは一理あると言う[9]。

ターラナータによれば、シャーキャシュリーバドラの所持本にはヤショーバドラの名があり、チャク翻訳官（1197−1163）・ダーナシーラ（12 世紀）もそれを認めて、パン翻訳官（1276−1342）による訳文改訂も同じ立場だったが[10]、一方［上記と］別の写本にも「Byang chub bzang po」とあるのを見たと述べており、サキャパンディタ（1182−1251）も同じくナーローが著したものではないと主張しているとする。

---

[4] 本稿 3-6（注 22）の記述もあわせて参照のこと。

[5] ① 奥山［1991］、Sferra & Merzagora［2006: 13 (n. 1)］、② Sferra & Merzagora［2006: 13 (n. 1)］、③ プトゥン『サンヴァラ史』（東北 5042、cha 47b5–6）。名前の最後にくる単語を取って「〜パーダ（猊下）」と呼ぶやりかたは『上師五十』第 34（35）偈（東北 3721、北京 4544）あるいは『上師恭敬難語釈』（東北 3722、北京 5013）の当該箇所に説明されている。「〜パーダ」を「〜パー」と略称する用例については上記 ① を参照されたい。

[6] ① については磯田［1976］が，①② については引用文献の同定を中心とした大観［2016、2018］の先行研究がある。ラトナーカラシャーンティあるいはナーローパーの著作問題については筆者と見解が異なる（注 2 参照）。① についてはサンスクリット語原典が遺されており、旧ポタラ宮所蔵の梵文写本にもとづき（Luo［1985: 191］）、中国蔵学中心（China Tibetology Research Center）と連携してナポリ東洋大学の Francesco Sferra 教授が研究を進めているとのことである。

[7] 「自伝」のこの内容についてはすでに加納［2020: (195), n. 3 (198)−(199)］）によって紹介・翻訳されている。

[8] ターラナータのこの記述は罗炤目録からも裏付けられる：kṛtir iyaṃ mahāmṛtasiddhācāryaśrīnāropādānām（こ［の難語釈］は偉大な不死の成就者にして吉祥なるナーロー猊下がおなしになったものである）（Luo［1985: 189］）。

[9] 罗炤目録は作者名としてコロフォーンに「カシュミール出身（Kāśmīra）」とあるとしながらも、肝心の名前の部分については判読が難しいとしてここでは翻刻を挙げていない（Luo［1985: 190］）。

[10] シャーキャシュリーバドラは『金剛句心髄集難語釈』の翻訳を主導し、チベットへの伝達にも大きな役割を果たしたとされる（羽田野［1986(1951): 249］）。この問題については本稿の終わりであらためて扱う。

ターラナータが紹介するこうしたチベット人の立場については典拠となった記述の同定とともにさらなる検証が必要であるが、ここではまず『金剛句心髄集難語釈』自体の末尾部分に関して検討することにしよう。

3-3 『金剛句心髄集難語釈』の著作動機と成立時期

『金剛句心髄集難語釈』の末尾部分に次のような記述が見出される。

VSSP 1. 2. 4 (D146a5–146b2, P168b8–169a5): dpal Pa ṭṭi ke ra ka ra gnas pa’i dpal gSer gyi mchod rtan gyi gtsug lag khang chen por gnas pa | tshul khrims kyi sdom pas bsdams pa | dge slong dam pa Dul ba’i dpal bshes gnyen la sogs pa rnams kyi gsol ba btab pa can dpal kha che chen po śhākya’i dge slong sNyan grags bzang po bla ma dam pa brgyud pa’i man ngag cing rnyed pas ji skad bshad pa’i gsang ba’i lung sna tshogs Kye’i rdo rje tshig rnams bsdus nas | skye bo dam pa’i yid kyi mtshor ngang pa’i mchog lta bu dpal Kye’i rdo rje’i rgyud la gsang ba’i rdo rje’i tshig gi snying po bsdus pa gsal bor rab tu gsal bar byed pa’i dka’ ’grel ’di byas so ||

（試訳）吉祥なパッティケーラカの地にある吉祥カナカストゥーパ大僧院におわす戒律によって護持された上比丘 *ヴィニータシュリーミトラ（Dul ba’i dpal bshes gnyen; *Vinītaśrīmitra）をはじめとするものたちの請願を受けたもの、吉祥なるカシュミール出身の偉大な釈種（大乗の）比丘・ヤショーバドラが最高の師子相承の口伝を授けられたそのままに解説した秘密のさまざまな口授としてのヘーヴァジュラに関する句を集めて、最上夫の心の湖にいる無上のハンサ鳥のような『吉祥ヘーヴァジュラタントラ』に関する秘密金剛句のなかでも輝かしい心髄として集められたものを明らかにさせるこの難語釈を作った。

’dir tshigs su bcad pa dag tu yang ’gyur te ||
rdo rje slob dpon bka’ drin dang || rnal ’byor ma rnams mnyes byed pas ||
man ngag thob pa kho nas ’dis || kye yi rdo rje’i dka’ ’grel byas ||
bde ba can du sems can rnams || ji ltar ’dod bzhin gnas gyur cig ||

（試訳）こ［のこと］について偈ともなす。すなわち、「金剛阿闍梨として認められヨーギニーたちを喜ばせることによって得られたまさしくこの口伝にもとづきヘーヴァジュラ難語釈がつくられた。楽土へと有情たちが願いどおりに到達しますように」。

dpal ldan bhaṃ ga’i sa’i bdag po dpal ldan ’phrog byed tshang pa’i lha’i rgyal srid rab tu ’phrel zhing rnam par rgyal ba la | lo bco brgyad pa la dbo can gyi zla ba’i tshes bdun la dka’ ’grel ’di grub pa’o ||

（試訳）吉祥ヴァンガ王という領主にして吉祥なる *ハリブラフマデーヴァ（’Phrog byed tshang pa’i lha; *Haribrahmadeva）王の御世に勝者の地において第 18 年の 2 月 7 日にこの難語釈は完成した。

以上のコロフォーンの記述によれば、カシュミール出身の大乗比丘ヤショーバドラの手によってパッティケーラカ（Paṭṭikeraka）国・カナカストゥーパ僧院にてヴァンガ王ハリブラフマデーヴァの御世に本書『金剛句心髄集難語釈』造られた。もし同王がハリカーラデーヴァと関係があれば、マイナマティの遺構から発見された碑文より、同書の成立は 1220 年前後が下限となり、仮にヴァンガ王がハリヴァルマデーヴァを指すのであれば 11 世紀終盤から 12 世紀前半が上限と言えるかもしれない[11]。

たしかにこのコロフォーンにはターラナータが指摘するとおり「カシュミール出身の釈種比丘ヤショーバドラ」とあるが[12]、もう一つ注目されるのはパッティケーラカにおいて同書の作成を依頼した比丘・ヴィニータシュリーミトラの存在である。彼の素性は残念ながら明らかではないが、『金剛句心髄集難語釈』におけるほぼすべての章の末尾にヴィニータシュリーミトラの名が記される。

いずれにせよ、ナーローパーの活動時期（956–1040/1016–1100）をも考慮すれば単純に『金剛句心髄集難

[11] Szánto［2017a: 490 (n. 6)］。パッティケーラカに関しては藤田［1993: 212］に加えてマイナマティ遺跡群と王家についての東［1994］をも参照されたい。
[12] 大乗仏教徒としての釈種比丘（Śākyabhikṣu）については静谷［1953］参照。
[13] ナーローパーの活動時期については Sferra & Merzagora［2006: 13 (n. 2)］を参照のこと。

語釈』をナーローパーの真作と位置づける立場にはやや慎重にならざるを得ない[13]。こうした疑問は本書がヘーヴァジュラへの注釈でありつつも、カーラチャクラ系の典籍とりわけ『無垢光』を中心とする「菩薩三部作」に依拠する特殊事情からも支持されよう[14]。

この事情については『金剛句心髄集難語釈』冒頭・同書の著作目的を述べた箇所にまとまった記述がある。

3-4 『金剛句心髄集難語釈』冒頭の著作目的

VSSP 1. 2. 1. 1 (D58b6–59a2, P69a6–69b1): da ni re zhig ’dir *dpal Dang po’i sangs rgyas rgyud* kyi mchog gi rim pa ji lta ba bzhin dang | dpal rDo rje snying po la sogs pa dang | dpal Phyag na rdo rje’i gsung rab dang rgyud gzhan ma lus pa legs par bshad pa las phyung ste | lung sna tshogs nas gsungs pa’i phyag rgya dang dkyil ’khor dang sngags dang spyin sreg dang las rab ’byams la sogs pa rgya che ba gting mi rtogs pa’i zab pas ’jigs pa nyid kyi shin tu bsdus nas | dpal Kye’i[1)] rdo rje’i tshig nges par bya ba cung zad cig bla ma dam pa’i brgyud pa’i man ngag gi rim pa thob pa’i kha che chen pos bdag nyid dran pa’i ched dang | slob ma rnams kyis rtogs pa’i ched[2)] du yang dag par bsdus te bri bar bya’o ||

[1)] kye’i DC] kye’i rdo rje’i PN [2)] ched DPN] tshe C

（試訳）さて、まず本書（『金剛句心髄難語釈』）においては ①『吉祥本初仏タントラ』*Śrī-ādibuddhatantra* を最高とする次第にしたがって、② 吉祥ヴァジュラガルバ及び吉祥ヴァジュラパーニの言説ならびに他のあらゆるタントラの善説より抽出して、さまざまな口伝にもとづき語られた大印と曼荼羅と真言と護摩と網羅された修法など広大にして底が見えない甚深によって畏怖せらる［諸々の教え］を集めて、③ 吉祥ヘーヴァジュラの句を確定するわずかな［文言］を最高の師が相承する口伝次第を得たカシュミールの大学者が自身の記憶のためと弟子たちが理解するために正しく集めて書き留めよう。

以上の記述のうち、① はカーラチャクラの根本的聖典あるいは『無垢光』を指し、② はカーラチャクラの体系にもとづいたヘーヴァジュラ・チャクラサンヴァラ（ラグサンヴァラ）注を示唆するものと思われる。①② の三書をあわせて「菩薩三部作」と通称される[15]。さらにヤショーバドラは次のように続ける。

VSSP 1. 2. 1. 2 (D59a2, P69b1–2): snyan dngags bkod tshigs mu stegs pas || bshad pas ma yin khengs pas min ||
kun mkhyen gsungs pa bshad pa la || de phyir mkhas pa rnams bzod mdzod || 1 ||
（試訳）流麗に（美文詩で）綴られた［この金剛］句を ① 外教徒は説かず、② 傲慢なものが［説くの］でもない。③ 一切知者の言説を説示するために［それは語られる］。ゆえに賢者たちよ、［秘密の教えを開示することを］ご容赦ください。

≈ VGSP (D24a4, P30b1–2): snyan dngags tshig gi bkod pa med || mu stegs kyis bshad ma yin tshad || kun mkhyen gsung gis bshad pas na || de phyir mkhas pas bzod par rigs ||

→ MĀ[I, TN] (Isaacson 2021: 468 (2001: 123), Tripathi & Negi 2001: 1.16–17) : aśraddhā mūlaripuḥ praṇāśapadam ekam iyam atiśraddhā | nanu sarvavit pramāṇaṃ na gauravāt sarvavid bhavati || MĀ[T] (D221a3–4, P362a5–6): dad pa med pa gtso bo’i dgra(D sgra) || lhag dad(D lha dang) gcig tu gol ba’i gnas || gang phyir kun mkhen tshad mas yin || gus pas kun mkhyen ’gyur ba min ||（試訳）①「不信心（aśraddhā）」とは根本的な敵であり、②「過信心（atiśraddhā）」とはすなわち破滅の原因となるものである。③ たしかに一切知者は正しい認識手段であるが、（我々が彼を）崇敬することによって一切知者なのではない。

[14] ① ヘーヴァジュラ（ヴァジュラガルバ注）、② チャクラサンヴァラ（ヴァジュラパーニ注）、③ カーラチャクラ（『無垢光』）をあわせたいわゆる「菩薩三部作」についてはその成り立ちや付随する三注釈とともに羽田野［1987a(1950): 26–27］、Sferra［2015: 342–344］）を参照されたい。

[15] 前掲注 12 参照。『金剛句心髄集難語釈』とりわけ冒頭部分はほとんど『無垢光』の借用部分から構築されており、後述するようにナーローパーの『灌頂略説注釈勝義集』との並行箇所も散見される。インド注釈文献がしばしばそうであるように、ヤショーバドラは借用する際に自分の立場にあわせて適宜にもとの文を改変していると考えられる。この問題については典拠となる部分の伝承の違いも含めて慎重に吟味する必要があり、かつ紙幅も限られるため今後の課題としたい。

同偈はヤショーバドラの基本的な立場を表明した部分に相当するものと思われるが、おそらくラトナーカラシャーンティのヘーヴァジュラ難語釈『真珠環』*Muktāvalī* 冒頭第 3 偈と同じ内容を指すものと考えられる[16]。そして具体的な注釈方法の指針について次のように明らかにする。

3-5 『金剛句心髄集難語釈』の注釈方軌

VSSP 1. 2. 2. 1 (D59a2–3, P69b2–3): de la dang por re zhig *dpal Dang po'i sangs rgyas* kyi rim pas | *dpal Kye'i rdo rje'i rgyud* kyi don bstan pa drang ba dang | nges pa'i don gyi rim pas gsal bar bya'o ||
（試訳）こ［の教えに］ついてまず最初に『吉祥本初仏タントラ』の次第どおりに『吉祥ヘーヴァジュラタントラ』の意味内容の教示を未了義・了義のやりかたで明らかにしよう。

続けて次に同書における注釈の方針が具体的に紹介されるが、『金剛句心髄集難語釈』と『灌頂略説』ないし『灌頂略説注釈勝義集』との関係が見出される部分として注目される。

聖典教示法（1）[17]
VSSP 1. 2. 2. 2 (D59a3–5, P69b3–5): mdor bstan pa yis ji ltar byung || rgyas par bshad pas rnam sbyong byed ||
sbas don rab tu rgyas bstan pas || rgyud la bstan pa rnam pa gsum || 3 ||
（試訳）① 略説（mdor bstan pa: uddeśa）によってありのまま出ていること、② 詳説（rgyas par bshad pas: nirdeśa）によって浄化をなすこと、③ 隠された意味を釈義すること（rab tu rgyas bstan pa: pratinirdeśa）とがタントラを教示する三種である[18]。

→ SU^{SM} kk. 3–5 (Sferra & Merzagora 2006: 68): uddeśas trividhas tantre nirdeśas trividho bhavet | pratyuddeśo mahoddeśaḥ pratinirdeśako 'paraḥ || 3 || uddeśa eva nirdeśas tantrasaṃgītir ucyate | pratyuddeśaś ca nirdeśaḥ pañjikā padabhañjikā || 4 || mahoddeśaś ca nirdeśaṣ ṭīkā sarvārthasūcikā | abhijñālābhibhiḥ sā tu kartavyā naiva paṇḍitaiḥ || 5 ||
SU^{T} (D14a3–4, P16a3–5): rgyud du mdor bstan rnam gsum dang || rgyas par bshad rnam gsum 'gyur || rab tu mdor bstan mdor bstan che || rab tu rgyas par bshad pa gzhan || 3 || mdor bstan rgyas par bshad pa nyid || rgyud yang dag par bsdus par brjod || rab tu mdor bstan rgyas bshad pa || bka' 'gral tshigs ni 'byed pa'o || 4 || mdor bstan chen po rgyas bshad pa || 'grel bshad thams cad don ston byed || de ni mdon shes rnams kyis || bya yi mkhas rnams kyis min nyid || 5 ||（試訳）タントラの ① 略説（uddeśa）とは三種であり、① 詳説（nirdeśa）も三種である。すなわち、② 語釈（pratyuddeśa）と ③ 詳解（mahoddeśa）と ② 釈義するもの（pratinirdeśaka）と ③ 他の［注解］とがある。① まさしく略説と詳説は聖典（tantra）の読誦であると語られる。② そして略説に対する詳説が語を分割する難語釈（pañjikā）である。③ さらに詳説と詳解することがあらゆる意味を指示する広注（ṭīkā）である。こ［れら三種］は神通を獲得したものたちによってなされるべきであり、決して学者たちによってなしえない。

→ PS^{SM} ad SU kk. 3–5 (Sferra & Merzagora 2006: 68–69): （1）sarvasminn eva yogayoginyādi-**tantra uddeśas trividhaḥ**. nirdeśo 'pi. tatroddeśaḥ svanāmnaiva kathitaḥ. **pratyuddeśo** dvitīyaḥ. **mahoddeśas** tṛtīyaḥ. evaṃ nirdeśo 'pi svanāmnaiva

[16] ラトナーカラシャーンティによれば、① 一切知者（ブッダ）を認めないのが不信心であり、② 言ってないことまで言ったと主張するのは過信心であり、どちらも同じくブッダを貶めることに繋がるとされる（Isaacson［2001: 126–127］）。ヤショーバドラがラトナーカラと同じ問題について意識していると思われる可能性については、ラトナーカラが取り上げるタントラ聖典への志向の問題についても同じく『金剛句心髄集難語釈』の冒頭部第 4 偈で述べられることに加えて上掲のシャーキャシュリーバドラ『金剛句心集難語釈』との類似性からも支持されうるかもしれない。

[17] この聖典教示法（1）に示された ① 略説（uddeśa）と ② 詳説（nirdeśa）、そして ③ 釈義（pratinirdeśa）については、次に紹介する『灌頂要説』ならびにナーローパー（ナダパーダ）による『灌頂要説』注『灌頂略説注釈勝義集』の内容と関係すると思われる。ナーローパーの記述についてはすでに Isaacson & Sferra［2015: 468–469］に全体の概要が示されている。

[18] ヤショーバドラがここで ① 略説・② 詳説・③ 釈義という枠組みを用いるのは、本書『金剛句心髄集難語釈』自体がタントラ聖典（①②）に対する釈義（③）としての難語釈という位置づけだからだと考えられる。

vyākhyātaḥ. **pratinirdeśo** dvitīyaḥ. **apara** iti mahānirdeśas tṛtīyaḥ. uddeśanirdeśau dvāv **eva tantrasaṅgītiḥ**. （試訳）（1）まさしくヨーガ・ヨーギニー［階梯］[19]などのあらゆる「タントラにおける略説は三種」である。「教示」も［同じく三種である］。このうち、① 略説とはそれ自身の名前だけで語られる。②「語釈」は二番目である。③「詳解」は三番目である。このように、① 詳説も同様に自身の名前だけによって解説される。②「釈義」は二番目である。「③「他のものは」とは詳解であり、三番目である。「略説」と「詳説」との二つだけがタントラを説示することである。

（2）tatroddeśena saṅgītiḥ samastalaghutantraṃ yathāṣṭādaśaśatagranthaśrīsamājādikā, nirdeśena saṅgītiḥ sakalamūlatantrarājadeśanā yathā pañca-viṃśatisahasraśrīsamājādikā. （2）こ［の三つの］うち、① 聖典（タントラ）の略説によって説示することがあらゆるラグタントラであり、たとえば 1800 頌からなる聖典『吉祥［秘密］集会』などである。② 教示によって説示するとはすべてのムーラタントラ王の教えであり、たとえば 25000 頌からなる吉祥［秘密］集会などである[20]。

（3）evaṃ pratyuddeśena laghutantre **pañjikā**. iha **nirdeśaḥ** pratinirdeśo ’bhimataḥ. tena mūlatantre pañjikā. tathā mahoddeśena laghutantre **ṭīkā**. iha **nirdeśo** mahānirdeśo ’bhimataḥ. mahānirdeśena mūlatantre ṭīkā. **sā** punaḥ saṅgītiḥ pañjikā ṭīkā ca tisro ’pi. **abhijñālābhibhir** iti divyacakṣurdivyaśrotra-paracittajñānasvaparapūrvanivāsānusmṛtyākāśagama-narddhilabdhair eva **kartavyā**. **naiva paṇḍitair** iti śuṣkatarkābhyāsopahatacittasantatibhiḥ pratyātma-vedanīyādhyātmādhyayanavimukhaiḥ. （3）そのように ② 註解によって［説示することが］ラグタントラに対する「難語釈」である。こ（の第 4 偈）では「詳説」は釈義であると考えられる。そ［の詳説］によって説示するのがムーラタントラに対する難語釈である。③ 同様に詳解によって［説示するの］がラグタントラに対する広注である。この箇所（第 5 偈）において詳解は詳説であると考えられる。詳説によって［説示するのが］ムーラタントラに対する詳説である。さらに「それは」とは、① 読誦と ② 難語釈と ③ 広注という三つ全部である。「神通を得るものたちによって」というのは、すなわち天眼・天耳・他心・宿命・神足［という五］通を得たものたちによって「なされるべきである」。「学者たちによっては決して［なしえない］」というのは乾いた学究を反復することにより心相続が損なわれたものたちすなわち自内証に関する自己についての学習から目を背けたものによって［はなしえない］ということである。

聖典教示法（2）

rdo rje theg pa mngon ’dod pa’i || rnal ’byor ldan pas shes par bya ||

[19] タントラにおけるヨーガ・ヨーギニー（階梯）あるいはヨーガ（階梯）以上という聖典分類法についてはアバヤーカラグプタ（11 世紀頃）の『アームナーヤマンジャリー』*Āmnāyamañjarī* 第 12 章における以下の記述が参考になる：ĀM (Skt. Ms. 316r3–317r1; F_{ED} 632–634): saddharmo bāhyaḥ kriyātantrādiḥ. tatra kriyātantraṃ trisamayarājabhūtaḍāmarādiḥ yatra snānamaunādibhiḥ kriyā bāhyaghaṭitacitrādau devatālambanam. caryātantraṃ vairocanābhisambodhiprabhṛtikam. guhyo yogatantrādiḥ. yogatantraṃ tattvasaṃgrahādikam. yogottaratantraṃ samājādikam. yoganiruttaratantraṃ yoginītantram.（中略）tatra yogatantram ity anena tattvasaṃgrahādikaṃ samājādikaṃ ca abhihitam. ata eva taddvayaṃ yogatantrakamatīty (°matī°] °malī° Ms) ucyate.（「外的な最高の法」とはクリヤータントラ（kriyātantra）など［下の二階梯］である。このうち、① クリヤータントラは『底哩三昧耶経』*Trisamayarāja* あるいは『ブータダーマラ』*Bhūtaḍāmara* などであり、そこにおいては沐浴・黙語などによってクリヤー（所作）があり、外的な立像あるいは図絵などにおける尊として認識するものである。② チャルヤータントラとは『大毘盧舎那成仏（神変加持）経』*Vairocanābhisaṃbodhi* などである。「秘密」とは ③ ヨーガタントラなどである。ヨーガタントラとは『真実摂経』*Tattvasaṃgraha* などである。④ ヨーゴッタラタントラとは『秘密集会』*Guhyasamāja* などである。⑤ 無上ヨーガタントラとはヨーギニータントラである。（中略）この［『ヴァジュラパンジャラタントラ』］に「ヨーガタントラ」と説かれたこのことによって『真実摂経』などと『秘密集会』などとが述べられた。まさしくこれゆえにこれら両者は［あわせて］ヨーガタントラと理解されると語られる。）

[20] 『吉祥金剛心髄荘厳タントラ』の説明によれば、『秘密集会』ムーラ（根本）タントラは 1000 頌であり、ウッタラ（続）タントラは 208 頌とされる（菊谷［2012: 221］）。ナーローパーがここで言う『秘密集会』の ① ラグタントラと ② ムーラタントラが現行の諸聖典とどのような関係にあるのかは別稿で扱う。

brgyud pa'i rim pa kho na yis || drang don nges don sbyar bar bya || 4 ||
rengs pa la sogs thams cad kyi || sngags dang dkyil 'khor lha rnams dang ||
spyod brda de bzhin lta stang dang || sbyin sreg don dang dam tshig sogs || 5 ||
nges pa'i don gang gsal bar bya || de rnams drang don la rtogs sla ||
rgyud kyi thog ma bar dang mtha' || kun du 'di ni nges pa yin || 6 ||
（試訳）［そのように］金剛乗を望むヨーガの実践者は知るべきである。まさしく相続の順序どおりに ① 未了義（neyārtha）と ② 了義（nītārtha）と［の教え］がつながるべきである。麻痺などに関するあらゆる真言や曼荼羅諸尊や標示ならびに視線の実践や護摩や三昧耶などおよそ了義であるものは明瞭にされるべきで、［そうした了義の諸説は］未了義に対して理解しやすい。最初と中間と最後［に説かれた］あらゆるタントラのうち、こ［の教えは］了義である[21]。

続いてタントラ聖典における一切知者の言説が具体的にどのようなものかが教証をもって示されるが、ここでは直接後続する次の一節を取り上げるにとどめたい。

教証（1）
VSSP 1. 2. 3. 1 (D59a5, P69a6–69b1): *dud par byed pa rnams kyis rgyud* kyi rgyal po ston par mdzad do ||
（試訳）『吉祥無垢光』（シュリーヴィマラプラバー）においてさらに次のように説かれている。「一切知者にして教示者などの集会するものによってタントラ王を教示させる」。
≈ VPU 1. 3 (Upadhyaya 1986: 29.19–20): sarvajñadeśakādisaṃgrahakais tantrarājaṃ deśayati.
VPT 1. 3 (D131a3–4, P28a5): thams cad mkhyen pa ston pa po la sogs pa'i(P pa) yang dag par(P omits) sdud par byed pa dag gyis rgyud kyi rgyal po ston par mdzad do ||

3-6 小結

以上、『金剛句心髄集難語釈』の冒頭部分が『灌頂略説』あるいは『灌頂略説』のナーローパー注『灌頂略説注釈勝義集』と内容的につながりがあることを指摘するとともにカーラチャクラ系の「菩薩三部作」なかでも『無垢光』に同書が依拠している点を指摘した。

カーラチャクラの系譜上におけるボーディバドラについては、大・小時足より彼につながる系譜に加え、マハーマティの『大秘密歓喜明点』*Rahasyānandatilaka*（東北 1345、北京 2477）奥書にボーディバドラがマハーマティの弟子として登場する点が重要である[22]。ターラナータはアディーシャ（アティーシャ（982−1054））の直接の師のボーディバドラ以外に複数の同名異人を立てる[23]。

このような問題はナーローパーの著作問題にも言える。『薄伽梵吉祥輪制成就法』*Bhagavacchrīcakrasaṃvarasādhana*（東北欠、北京 4614）のコロフォーンには、同書がカシュミールの大学者アバヤキールティの手になることが記されており、インドの学者ナーローパー自身によってマルパ翻訳官（1012–1097）

[21] 『灌頂略説』にはさきの並行箇所の直後に同じく了義・未了義に関わる「六辺（ṣaṭkoṭi）」の記述があり、『灌頂略説注釈勝義集』とあわせて今後は「秘密集会」聖者流の影響も視野に入れる必要があるだろう。注釈基準における聖者流の了義・未了義の問題については「六辺」の内容とあわせて松長［1963］、Isaacson & Sferra［2015: 469–470］をも参照のこと。

[22] (D336a6–7, P260b6–7): slob dpon yul(DP yu) so ma pu rir byung ba'i dge slong dpal ldan byang chub bzang po'i bla ma | dpal ma hā ma ti'i zhal snga nas mdzad pa rdzogs so ||（阿闍梨にしてソーマプリー出身の比丘吉祥ボーディバドラの師・吉祥マハーマティの御口でなされたもの終わり。）

[23] 『仏教史』第 38 章においてターラナータはタターガタラクシタの後継でヴィクラマシーラ寺の学頭を務めた人物として彼の名を挙げ、さらにこの時代には複数のボーディバドラがいたと述べる。

[24] (P71b7–8): kha che'i pa ṇḍita mkhas pa chen po 'jigs med grags pas mdzad pa'i yid bzhin nor bu zhes bya ba | dkyil 'khor rgyas pa'i sgrub thabs rdzogs so || rgya gar gyi pa ṇḍita mkhas pa chen po na ro pa de nyid kyi zhal mnga' nas dang | bod kyi lo tsāwa(P tstcha ba) mar pa chos kyi blo gros kyis | pu la ha ri'i dgon pa ru zhus zhing gtan la phab pa'o ||（カシュミール出身のパンディタにして大学者アバヤキールティによって造られた「如意宝珠」という名の曼荼羅広大成就法終わり。インドのパンディタにして大学者ナーローパー自身の御口でもってチベットの翻訳者マルパ・チューキーロトゥーがプラハリの精舎で校閲して決定した。）

とともにプラハリの精舎で訳出されたと記されているが[24]、先述したように（本稿 2）アバヤキールティーはナーローパーの弟子の名前でもあるため、単純に両者を同一人物と結論づける立場にはやや警戒せざるを得ない。

一方で『金剛句心髄集難語釈』については、上記したように少なくとも現時点では『金剛句心髄集難語釈』と『灌頂略説注釈勝義集』の著者とは同一人物とみなしても良いと考えられる。

4 おわりにかえて—『金剛句心髄集難語釈』と『金剛句心集難語釈』

4-1 シャーキャシュリーバドラと『金剛句心髄集難語釈』

ヴィクラマシーラ最後の僧院長シャーキャシュリーバドラは『金剛句心髄集難語釈』の翻訳を監督し（実際の訳出はチャル翻訳官チューキーサンポ）、のちにパン翻訳官によって同書の改訂がなされた。前述したように『金剛句心髄集難語釈』はそのそもカーラチャクラと密接な関係をもつが、さらにシャーキャシュリーはカーラチャクラ系の「六支ヨーガ（ṣaḍaṅgayoga）」に関して個別に次の二書を著した。

①『金剛句心集』**Vajrapadagarbhasaṃgraha*（東北 1390、北京 2106）
②『金剛句心集難語釈』**Vajrapadagarbhasaṃgraha-pañjikā*（東北 1391、北京 2107）

①②、とりわけ ② に記されたチベット語訳タイトルはナーローパーの『金剛句心髄集難語釈』と同じであり、内容的にも ② は『金剛句心髄集難語釈』の文章を下敷きになされていることから、両書が本来同一タイトルであった可能性もあるだろう。

たとえば、② については巻頭の敬礼偈と巻末の回向偈とを『金剛句心髄集難語釈』から流用して作られている[25]。

①② ともに全体が六支の枠組みで構成されているが、① の内容はヘーヴァジュラ系のさまざまな聖典を抜粋したものであり、② については ① への注釈と位置付けられながらも、実際には『金剛句心髄集難語釈』あるいは「菩薩三部作」の内容に依拠して作られている。①② 両書の関係については『金剛句心髄集難語釈』あるいは「菩薩三部作」との関係をもあわせて再検討が必要であるが、本稿ではまずサンプルとして ② の冒頭部分だけを取り上げたい。

4-2 シャーキャシュリーバドラ著『金剛句心集難語釈』冒頭部

VGSP 1．2 (D23a2-6, P28b4-7): ’dir re zhig *dpal ldan Dang po mchog gi sangs rgyas rgyud* kyi rim pa dang | rDo rje snying po la sogs dpal ldan[1)] Phyag na rdo rje’i gsung rab dang rgyud phan tshun legs par gsungs pa ma lus pa nye bar bsdus te | phyag rgya dang dkyil ’khor dang sngags dang spyin sreg dang las kyi tshogs la sogs pa rgya che ba zab cing rtogs par dka’ bas skrag pa dag lung du ma nas gsungs pa | cung zad cig yang dag par bsdus te dGyes pa’i rdo rje’i | rdo rje’i tshig nges par bya ba ni | bla ma dam pa dag las thob cing man ngag gi rim pa rnyed[2)] pas na rang nyid dran par bya ba dang | slob ma rnams kyi rtogs par bya ba’i phyir yang dag par bzung[3)] ste bri bar bya’o ‖ [1)] dpal ldan DC] dpal PN [2)] rnyed DPC] snyed N [3)] bzung DC] gzung PN

（試訳）まず本書（『金剛句心集難語釈』）では、①『吉祥本初仏タントラ』*Śrī-ādibuddhatantra* の次第と、② ヴァジュラガルバなどと吉祥ヴァジュラパーニの善説ならびにそれぞれ善く説かれたタントラを残さず完全に集めて、大印と曼荼羅と真言と護摩ともろもろの修法など、広大甚深にして理解し難く畏怖せらる多くの口伝にもとづき語られたものの一部を正しく集めて、ヘーヴァジュラの金剛句を確定することは、③ 最高の師たちからの伝授あるいは口伝次第を獲ることによって、［『金剛句心集』・『難語釈』両書は］自身の記憶のために作りさらに弟子たちの理解のために保持し書き留められるべきである。

さきに紹介したナーローパーの『金剛句心髄集難語釈』とほとんど同内容ではあるが、一見すればわかるように細部において随所に改変が加えられている。さ

[25] 『金剛句心集難語釈』の巻末偈については本稿（3-4）参照。

らに他の箇所においてヴァジュラガルバのヘーヴァジュラ注およびヴァジュラパーニのラグサンヴァラ注とのパラレルはより顕著に見出される[26]。

従来の研究ではあまり注目されていなかったシャーキャシュリーバドラの二書は『金剛句心髄集難語釈』の伝承過程に加えて「金剛句」をめぐる密教文献の形成過程を明らかにするためのいくつかの手がかりを提供するものと思われる。

さらに本稿で扱った『金剛句心髄集難語釈』の注釈用語の定義（3-5）はインド密教だけでなく、インド・チベットにおける注釈文献の研究にも今後いくつかの材料を提供することが期待できる。

参照文献

一次文献と略号

AM: *Āmnāyamañjarī* = Abhayākaragupta's *Āmnāyamañjarī* on the *Sampuṭatantra*. Bilingual (Sanskrit-Tibetan) manuscript published in: 'Jam blo (ed.): Dpal yang dag par sbyor ba'i rgyud kyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa. Chengdu, Sichuan: Si khron mi rigs dpe skrun khang/ Sichuan Nationalities Publishing House, 2015. Rare and Ancient Texts Collected in Tibetan Regions Series Volume 1.

BBK: 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著 1989 『梵語仏典の研究（4）密教経典編』京都・平楽寺書店.

HV: *Hevajratantra* = David L. Snellgrove (ed.): *The Hevajra Tantra: A Critical Study.* Part 2: *Sanskrit and Tibetan Texts*. London: Oxford University Press, 1959. See also E_{TN} under *Muktāvalī Hevajratantrapañjikā* below.

MĀ: *Muktāvalī Hevajratantrapañjikā* = Ram Shankar Tripathi and Thakur Sain Negi (eds.): *Hevajratantram* with *Muktāvalī Pañjikā* of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2001. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 48.

PS: *Paramārthasaṃgraha Sekoddeśaṭīkā* = Francesco Sferra and Stefania Merzagora (eds.): The *Paramārthasaṃgraha* by Nāropā (*Sekoddeśaṭīkā*). Critical edition of the Sanskrit text by Francesco Sferra and critical edition of the Tibetan translation by Stefania Merzagora. Roma: IsIAO, 2006. Serie Orientale Roma, xcix.

VP: *Vimalaprabhā* by Puṇḍarīka: Jagannātha Upadhyāya (ed.): *Vimalaprabhāṭīkā* of Kalkin Śrīpuṇḍarīka on *Śrīlaghukālacakratantrarāja* by Śrīmañjuśrīyaśas, Vol. 1 [paṭalas 1–2]. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1986. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 11.

VGS: **Vajrapadagarbhasaṃgraha* by Śākyaśrībhadra (東北 1390, 北京 2106).

VGSP: **Vajrapadagarbhasaṃgrahapañjikā* by Śākyaśrībhadra (東北 1391, 北京 2107).

VSSP: *Vajrapadasārasaṃgrahapañjikā* by *Yaśobhadra (東北 1186, 北京 2316).

二次文献

Bandurski, Frank. 1994. "Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texts (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, III)." In: Frank Bandurski et al. Untersuchungen zur buddhistischen Literatur. Sanskrit-Wörterbuch den buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden. Göttingen: Vandenhoek & Ruprecht, pp. 9–126.

Cicuzza, Claudio. 2001. The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi: A Critical Edition of the Sanskrit Text. Serie orientale

[26] シャーキャシュリーバドラの『金剛句心集』ならびに『難語釈』の問題は『金剛句心髄集難語釈』とあわせて準備中の別稿にて改めて詳細に扱う予定であるが、『難語釈』の末尾に回向偈としてヴァジュラガルバのヘーヴァジュラ注からの巻頭偈が記されているのも注目される（D23a6–23b1, P31a4–7 = Vajragarbha 4b3, 4b7–5a1）。

Roma LXXXVI. Roma: Istituto italiano per l'Africa e l'Oriente (IsIAO).

Isaacson, Harunaga. 2001. "The opening verses of Ratnākaraśānti's Muktāvalī (Studies in Ratnākaraśānti's tantric works II)." In: Ryutaro Tsuchida and Albrecht Wezler (eds.): Harānandalaharī: Volume in Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday. Reinbek: Dr. Inge Wezler Verlag für Orientalistische Fachpublikationen, 2000, pp. 121–134.

2010. "Observations on the development of the ritual of initiation (abhiṣeka) in the higher Buddhist Tantric Systems." In: Astrid Zotter (ed.): Hindu and Buddhist initiations in India and Nepal. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 261–280.

2021. "A Critical Edition of Ratnākaraśānti's *Muktāvalī Hevajrapañjikā*: Commentary on Hevajratantra I.i.1–12." In: Volker Caumanns, Jörg Heimbel, Kazuo Kano, and Alexander Schiller (eds.): Gateways to Tibetan Studies: A Collection of Essays in Honour of David P. Jackson on the Occasion of his 70th Birthday, Volume One (Indian and Tibetan Studies 12.1). Hamburg: Department of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg, pp. 461–507.

Isaacson, Harunaga and Sferra, Francesco. 2015. "Tantric Commentaries: South Asia." In: Brill's Encyclopedia of Buddhism Volume 1: Literature and Languages. Leiden/ Boston: Brill Academic Pub, pp. 467–482.

2019. "Indian Tantric Authors: Overview." In: Brill 's Encyclopedia of Buddhism, Volume 2: Lives. Leiden/ Boston: Brill Academic Pub, pp. 228–260.

Prasad, Birendra. 2021. Archaeology of Religion in South Asia: Buddhist, Brahmanical and Jaina Religious Centres in Bihar and Bengal, c. AD 600–1200. London: Routledge.

Sāṅkṛtyāyana, Rāhula. 1935. "Sanskrit Palm-Leaf Mss. in Tibet." Journal of the Bihar and Orissa Research Society 21(1): 21–43.

Sferra, Francesco. 2009. "The Laud of the Chosen Deity. The First Chapter of the Hevajratantrapiṇḍārthaṭīkā by Vajragarbha." In: Einoo Shingo (ed.): Genesis and development of Tantrism (Institute of Oriental Culture special series, 23). Tōkyō : Sankibō Busshorin, pp. 435–469.

2015. "The Elucidation of True Reality The Kālacakra Commentary by Vajragarbha on the Tattvapaṭala of the *Hevajratantra*." In: Edward A. Arnold (ed.): As Long as Space Endures: Essays on the Kālacakra Tantra in Honor of H.H. the Dalai Lama. New York: Snow Lion Publications Ithaca, pp. 93–126.

2015. "KĀLACAKRA." In: Brill's Encyclopedia of Buddhism, Volume 1: *Literature and Languages*. Leiden/ Boston: Brill Academic Pub, pp. 341–352.

Szántó, Péter-Dániel. 2017. ""Minor Vajrayāna Texts IV. A Sanskrit Fragment of the *Rigyarallitantra*."" In: Vincenzo Vergiani, Daniele Cuneo, and Camillo Alessio Formigatti (eds.): Indic Manuscript Cultures through the Ages. Material, Textual, and Historical Investigations (Studies in Manuscript Cultures). Berlin: De Gruyter, pp. 487–504.

東　智学　1994「バングラデシュ・マイナマティ遺跡群の歴史的背景」『高野山大学密教文化研究所紀要』7: 165–182.

磯田熙文　1975「ṣaḍaṅga-yoga をめぐって」『印度学仏教学研究』25(1): (69)–(77).

大観慈聖　2016　「『金剛句心髄集難語釈』の引用文献について——ナーローパの思想的立場をめぐって」『密教文化』237: (27)–(69).

2018「『一切秘密燈広註』に関する一考察——著者ナーローパをめぐって」『密教文化』240: (59)–(90).

奥山直司　1991「ある聖者の伝説」『インド思想における人間観東北大学印度学講座 65 周年記念論集』京都・平楽寺書店, pp. 463–486.

加納和雄　2017「ヴィクラマシーラ寺の六賢門をめぐる史料とその問題」『印度学仏教学研究』65(2): (108)–(114).

2020「中世チベットの僧院における梵文写本の蔵書例：チュン・リウォチェとポカン」『印度学仏教学研究』68-2: (194)–(200).

菊谷竜太　2012「インド密教における『秘密集会タントラ』の受容と展開——『吉祥金剛心髄荘厳タントラ』*Śrīvajrahṛdayālaṃkāratantra* を中心に」『日本仏教学会年報』77: 213–235.

静谷正雄　1953 「インド仏教銘文に見出される Śākyabhikṣu（釈種比丘）なるタイトルについて」『印度学仏教学研究』1(2): (362)–(363).

田中公明　1994『超密教時輪タントラ』大阪・東方出版.

苫米地等流　2017「Abhayākaragupta 作 Āmnāyamañjarī 所引文献——新出梵文資料・第１～４章より」『大正大学綜合佛教研究所年報』39: (99)–(136).

西岡祖秀　1983「『プトゥン仏教史』目録部索引 III」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6: 47–201.

羽田野伯猷　1986 (1951)「Kāśmīra-mahāpaṇḍita “Śākyaśrībhadra” チベット近世仏教史・序説」『チベット・インド学集成』第 1 巻, 京都・法蔵館, pp. 239–258.

1987a (1950)「時輪タントラ成立に関する基本的課題」『チベット・インド学集成』第 3 巻, 京都・法蔵館, pp. 10–35.

1987b (1958)「Tāntric Buddhism における人間存在」『チベット・インド学集成』第 3 巻, 京都・法蔵館, pp. 50–165.

藤田光寛　1993「パーラ王朝の諸王が建立した四大仏教寺院」『高野山大学密教文化研究所紀要』6: 199–216.

松長有慶　1963「七飾について」『印度学仏教学研究』11(2): 92–98.

Bauddhakośa Newsletter no. 10（2022 年 3 月 10 日発行）

発行元：Bauddhakośa プロジェクト

バウッダコーシャの総括的研究：仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて
【科学研究費補助金基盤 (A)（研究課題番号：19H00523）】
（The Development of Bauddhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences
【Grant-in-Aid for Scientific Research (A)】）

〒 112-0003
東京都文京区春日 2-8-9
国際仏教学大学院大学
斉藤科研費研究室
Email: office.bauddhakosha@gmail.com

印刷　株式会社サンワ

Bauddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。
`http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html`